

## 〈論文〉

## 現代台湾における原住民母語復興（2）

## ——教科書・教材内容の検討——

石 垣 直

## はじめに

筆者は先に発表した拙稿 [石垣 2015] において、台湾における原住民（オーストロネシア語族系先住者集団）に対する母語復興政策の歴史と最新の政策についてまとめ、その特徴を検討した。そこからは、①台湾の民主化と多文化主義政策ならびに原住民運動の高揚と原住民母語復興との密接な関わり、②全国的な母語テストの実施と諸メディアを利用した教科書・教材の提供、③母語教師育成課程や正課外での母語教育の取り組みなどが明らかになった。しかし、同論文の力点は政策史と現行の諸政策の整理・検討にあったため、教科書・教材の具体的な内容紹介と検討、さらには母語教育現場の実情と課題については、十分な資料提示や考察が出来なかった。そこで本稿では、このうちの前者を課題として、議論を進めたい<sup>(1)</sup>。

原住民母語復興の中で作成・使用されてきた教科書・教材に関しては、台湾国内においていくつかの先行研究がある。例えば、台湾の原住民母語復興政策における学術・研究分野からの牽引者の一人である黄美金は、1990年代半ばから本格化する母語教科書作成の経緯およびその展開を整理している [黄 1995、2007]。また、2000年代初頭に教育部（文部科学省）および行政院原住民族委員会（以下、原民会）の委託を受けて政治大学の「原住民族語言教育文化推展中心」（現「原住民族研究中心」。以下、政治大学 ALCD）が作成した全国的な教科書『国民中小学九年一貫 原住民族語教材』（以下、「九階教材」）の内容や構成などについても、複数の論考（例えば、タロコ語、サイシャット語等）が発表されている [林 2007；高 2007；許 2007] <sup>(2)</sup>。

母語教科書・教材の内容に関しては上述の諸論考があるものの、日本を含め台湾以外の地域において、台湾原住民母語教科書・教材の歴史的変遷や具体的内容を詳細に紹介・検討した論文は管見の限り皆無である。また台湾でも、特定の教科書・教材に関する検討は発表されているが、黄美金のいくつかの研究を除き、教科書・教材全般にわたる概観や検討を行ったものはない。こうした現状は、近年多く出版されている語彙集・辞典そしてインターネット教材などについても同様である。しかし、教科書・教材の内容や構成の検討は、台湾はもちろんのこと、世界各地の危機言語の復興に向けた具体的に可能な施策を考える上でも、極めて重要な意義をもつものだと考える。

以上のような問題意識に基づき、本稿では以下の構成で論を進めていきたい。まず第1章では、上述の先行研究を基礎としながら、台湾原住民母語復興における教科書・教材作成の歴史を整理する。第2章では、母語復興政策開始当初（1990年代）に用いら

れた母語教科書・教材の内容を紹介する。第3章では、2000年代に行われた全国的な取り組みにおいて編纂された教科書・教材を取り上げ、第4章では、その他の教材、すなわち地域毎あるいは有志が編纂・出版する補助教材・語彙集、さらにはインターネットその他のデジタル教材の内容を紹介する。そして最終章では、台湾原住民母語復興における教科書・教材作成の歴史・プロセス・内容の特徴を、改めて整理・検討する。

なお、本稿の内容は基本的に台湾原住民母語政策で用いられる教科書・教材全般を対象としたものだが、筆者の個人的な調査・資料収集・分析能力の限界から、第2章以降で扱う具体的な教科書・教材は、主としてブヌン（〈布農族〉、Bunun）<sup>(3)</sup>に限定する。

## 1. 原住民母語教科書・教材作成の歴史

### 1. 1 母語教科書・教材作成の歴史（1）——1990年代の試験的な取り組み

周知のように、台湾における母語（郷土語）教育の歴史は、1990年から台北県（現在の新北市）郊外の烏来国民中学校・小学校でのタイヤル語教育に始まる〔黄 2007〕。しかし、こうした動きは民主化期に突如として始まったわけではなかった。台湾の原住民諸語に関する記録・研究の歴史は、17世紀のオランダ統治期にまで遡り、当時すでに西部平地の諸民族の言語に関する語彙集が編纂されていた。また、日本統治期にも統治上の理由から、多くの語彙集がまとめられ、言語学者による原住民諸語の記録研究も行われた。さらに戦後は、精力的なキリスト教宣教の過程で、外国人宣教師、台湾人宣教師、そして原住民自身の協力のもと、日本語のカタカナ、中華民国の注音符号、そしてアルファベットなどを用いた聖書や讃美歌集の各民族語訳が編纂されていた〔李 2011〕。

原住民諸語に関する記録・研究の歴史に加え、1990年代には行政・学術界主導の施策も開始された。例えば 1992 年には、教育部の委託を受けた言語学者の李壬癸（Paul Li）が、台湾における後の原住民諸語正書法の前案となる「台湾南島語言的注音符号系統」（オーストロネシア語標準表記法）を発表した。また、1994 年には同じく教育部主導で「国民中小学原住民語言教材大綱」（国民中学校・小学校原住民言語教材大綱）が制定され、さらに原住民諸語に関する研究・著作への評価・表彰・補助なども次第に実施された〔黄 2007:214〕。なお、1990年代初頭には、母語の記録・保存・継承の重要性を認識した原住民教員などによって、タイヤル語、アミ語、パイワン語などの教科書が出版されている。しかしながら、数世紀にわたる地道な記録・研究作業が下地となり、かつ行政側のサポートが漸次的に進められたとはいえ、1990年代初頭の母語教科書・教材作成は、依然として暗中模索の状況にあった。

その後、1995 年からは教育部が多額の予算（5,000 万元超）を投じた 4 年計画の郷土語・原住民諸語教材編纂プロジェクト（1995～1998 年）が実施された。教育部が進めた同プロジェクトを請け負ったのは各県・市の教育関連部門であり、最終的には個々

の行政区域内の関連する学校がスタッフを招集し、実際の編集作業に当たった。その成果として、1998年には11の原住民諸語、ならびに台湾のマジョリティである閩南系漢族の「河洛語」（閩南語）、同じく福建・広東省にルーツをもつ人々の「客家語」など、計13グループの教科書・教材として『国民小学郷土語言教材』が作成された[教育部（編）1998]。（写真1）

写真1 『国民小学郷土語言教材』（全13冊）[教育部（編）1998]



出典：筆者撮影（2015年9月）

## 1. 2 母語教科書・教材作成の歴史（2）——2000年代以降の全国的な取り組み

2000年代に入ると原住民母語復興の動きは、民主化潮流ならびに政権交代を実現し与党となった民進党の施策によって、さらに大きく前進することになった。そのひとつの柱は2001年から開始された「原住民族語言能力認証考試」（母語認証テスト）であった。前稿でも指摘したように、政府公認のこのテストは、民主化以降に進展した多文化・多言語主義政策ならびに「原住民族教育法」（1998年）を踏まえたものであった。同テストは、次の3方式によって年1回のペースで実施された。その3方式とは、すなわち、長年にわたって母語教育やキリスト教宣教に従事してきたネイティブや外来の研究者・宣教師などを対象とした教育・研究業績に基づく①「書面審査」、アルファベットの書き取りなどに不慣れな55歳以上の原住民を対象とし原住民関連団体／教会／地方自治体などからの推薦を必須条件とした②「推薦審査」、そして①・②に該当しない一般の受験者が受験する③「一般試験」（筆記試験および面接試験）である[石垣2015]。「12言語38方言」に対して実施されたこの公認テスト（第3方式）に対応すべく、政治大学ALCDが編纂したのが、民族毎のテスト用問題集『原住民族語練習題』[政治大学原住民族語言教育文化推展中心（編）2001a]であった。

原住民母語復興に向けて2000年代初頭に始まったもうひとつプロジェクトが、教育部および行政院原民会から委託を受けて政治大学ALCDが2002年から進めた「14族40種」を「話」（言語・方言）網羅した全国的な母語教科書・教材編纂プロジェクトであった。3年計画で進められたこの大規模プロジェクトは（最終的には2005年に完成）、国民小学校では必修課程として、また中学校では選択必修の科目としてカリキュラム化された郷土語・原住民母語教育に対応したもので、個々の「話」（言語・方言）毎に「第1階」（第

1段階) から「第9階」(第9段階) までの各段階に応じた「学生手冊」(学生テキスト)と「教師手冊」(指導ガイド)が編纂された。すなわち、40 言語 × 1～9段階、それが学生テキスト／指導ガイド各2冊ずつで、総計 720 冊(種類)に上る原住民母語教育用教科書・指導ガイドが編まれ、その大部分が、原住民母語教育を行う全国各地小学校・中学校に配布されたのである。(表1) なお、全段階の教科書内容は、音声データも含め、政治大学 ALCD のホームページで閲覧・視聴可能となっている<sup>(4)</sup>。

表1『国民中小九年一貫課程 原住民語教材』一覧表

	民族(言語)	社群(方言)	学生手冊	教師手冊	段階
A	タイヤル(泰雅族)	01. スコレク語	○	○	1～9
		02. ツオレ語	○	○	1～9
		03. 汶水語	○	○	1～9
		04. 萬大語	○	○	1～9
	〔後にタロコ及セデックとして独立(太魯閣族,賽徳克族)〕	06. タロコ語	○	○	1～9
		07. タカダヤ語	○	○	1～9
		08. トダ語	○	○	1～9
B	サイシャット(賽夏族)	05. サイシャット語	○	○	1～9
C	ブヌン(布農族)	09. タケトド語	○	○	1～9
		10. タケバカ語	○	○	1～9
		11. タケヴァタン語	○	○	1～9
		12. タクバヌアズ語	○	○	1～9
		13. イシブクン語	○	○	1～9
D	サオ(邵族)	14. サオ語	○	○	1～9
E	ツォウ(鄒族)	15. ツォウ語	○	○	1～9
	〔カナカナブ(卡那卡那富族)〕	16. カナカナブ語	○	○	1～9
	〔サアロア(拉阿魯哇族)〕	17. サアロア語	○	○	1～9
F	ルカイ(魯凱族)	18. 霧台ルカイ語	○	○	1～9
		19. 東ルカイ語	○	○	1～9
		20. 多納ルカイ語	○	○	1～9
		21. 萬山ルカイ語	○	○	1～9
		22. 茂林ルカイ語	○	○	1～9
G	プユマ(卑南族)	23. 南王プユマ語	○	○	1～9
		24. 初鹿プユマ語	○	○	1～9
		25. 知本プユマ語	○	○	1～9
		26. 建和プユマ語	○	○	1～9

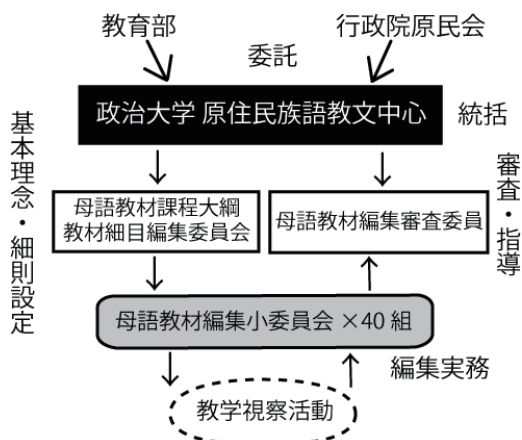


H	パイワン（排湾族）	27. 北パイワン語	○	○	1～9
		28. 中パイワン語	○	○	1～9
		29. 南パイワン語	○	○	1～9
		30. 東パイワン語	○	○	1～9
I	サキザヤ（奇萊族）	31. サキザヤ語	○	○	1～9
J	アミ（阿美族）	32. 北部アミ語	○	○	1～9
		33. 中部アミ語	○	○	1～9
		34. 馬蘭アミ語	○	○	1～9
		35. 海岸アミ語	○	○	1～9
		36. 恒春アミ語	○	○	1～9
K	クヴァラン（噶瑪蘭族）	37. クヴァラン語	○	○	1～9
L	ヤミ（タウ 雅美族、達悟族）	38. ヤミ語（タウ語）	○	○	1～9
M	パゼツペ（巴宰族）	39. パゼツペ語	○	○	1～9
N	カハブ（噶哈巫族）	40. カハブ語	○	○	1～9
	計	40 語	360 種	360 種	720 冊

出典：政治大学原住民語言教育文化研究中心（編）[2006] をもとに筆者作成

この大規模プロジェクトは、いかにして可能となったのか。2001 年に教育部および行政院原民会から委託を受けた政治大学 ALCD は、翌年、その監督下に「民族言語教材課程大綱及教材細目編集委員会」を組織し、「族語教材課程大綱」を策定した。ALCD はさらに、この委員会の配下に各「言語」（計 40）の「母語教材編集小委員会」を組織させ、同小委員会による編纂作業を指導・監督した。なお、各母語教材小委員会が作成した母語教材は、同じく政治大学 ALCD のもとで選出された「族語教材編集・審査委員」によって審査・チェックを受けた[林（主編）2006; 林 2007]。各「言語」の「母語教材編集小委員会」は原則 6 人によって構成され、240 人の編集委員、ALCD の統括スタッフも含め総勢約 250 人がこの全国的な原住民母語教材編集プロジェクトに携わった[林 2007 : 230]。この組織図・編纂プロセスをまとめたのが、次の図である。

図 「国民中小九年一貫 原住民族語教材」編纂の組織およびプロセス



出典：林（主編）[2006：18]をもとに筆者編集・作成

その後、2007 年からは、高校・大学などへの進学者を対象とした加点（35％）の条件として「進学用母語能力テスト」（「原住民学生升学優待取得文化及語言能力證明考試」）が開始され。この施策は、2006 年9月に教育部が公布した「原住民学生升学優待及公費留学辦法」に依拠したもので、行政院原民会の委託を受けた「台湾語言学学会」によって同試験対策用として編纂されたのが、『進学用母語能力テスト教材・練習問題』（以下、進学用母語能力テスト問題集）であった。同問題集もまた、テストの区分に合わせ、13 族 43 方言に対応したものが用意された。各問題集の巻頭にある編集説明によれば、このシリーズは「国民中小学九年一貫課程 原住民族語教材」シリーズ（上記「九階教材」）の第1段階から第3段階の内容を基礎とし、それに各民族の日常生活用語などを加えたものであると言う。

前稿でも述べたように、母語認証テストと進学用母語能力テストは最終的に統合され、2014年12月からは初級・中級・上級・薪伝級の4段階に分けた「母語能力測定テスト」（「原住民語言能力認證測驗」）が実施されるようになっている〔石垣 2015〕。しかし、現在までのところ、新たに始まったこの全国テストの各レベルに対応した教科書・教材が別途編纂されるということではなく、唯一、初級を学び終えた者を対象に読み書き能力を高める教材として『原住民族語中級教材』〔政治大學原住民族研究中心（主編）2014〕が発表されているのみである（第4章で詳述）。現在はむしろ、行政院原民会のその他の機関が語彙集や辞書といった補助教材の研究・出版を資金的にサポートする一方で、これまでに作成された全国的な教科書・教材を基礎とし、さらにそれ以外の補助教材（例えば、「句型篇國中版」、「句型篇高中版」など）をネット上で公開して母語教育・母語復興の可能性を高めようと試みている段階だと言えるだろう。

以下では、「母語復興初期」（1990 年代）、「母語教育政策充実期」（2000 年代初頭）、

「その他の教科書・補助教材」の三つに分けて、個々の教科書・教材の具体的な内容を紹介し、その特徴について検討してみたい。

## 2. 母語復興初期 (1990 年代) の教科書・教材

上述のように、1990 年代にはさまざまな母語教材が試行錯誤的に編纂された。学校・地域毎で編纂されたものもあれば、1990 年代後半に教育部の補助を受けて作成された母語教科書・教材もある。以下では、筆者が入手したブヌン語教科書・教材を事例とし、その概要を紹介し、内容の特徴を明らかにしてみたい。

### 2. 1 『布農族母語課本 (二) 読與寫』——初期の暫定的な取り組み

本書は、筆者が確認した限りにおいて、台湾の国家図書館や中央研究院各図書館に所蔵されている母語復興期に編まれたブヌン語学習のための教科書・教材の中で最も古いもので、1993 年出版となっている [何・曾 1993]。同書には「まえがき」その他の説明がないため、どのような教材シリーズの 1 冊なのか明確ではない。ただし、表紙および裏表紙の記載内容から、台湾中部に位置する南投県のローマ・カトリック団体 (南投県天主教山地服務研究社) が出版したものであることが確認できる。

同書は全 24 ページの冊子で、①母音／②子音／③問いと応答／④語彙のセクションに分かれている。基本的には、アルファベットでのブヌン語表記法を学習するという内容である。同書の冒頭には、アルファベット A～Z の大文字・小文字および筆記体が並べられ、次ページ以降には個々のアルファベットが用いられるブヌン語の発音が挿絵とともに紹介されている。記載されているのは、ブヌン語で用いられる母音 (a, i, u) および子音 (b, c, d, h, k, l, m, n, ng, p, q, s, t, v, z)、計 18 文字 (18 音) である。続く 1 ページ以降は、それぞれ母音・子音の順でアルファベットと関連するブヌン語が挿絵入りで紹介され、アルファベット毎に 2 個～9 個のブヌン語の単語が挙げられ、綴り練習のスペースが設けられている。その後、19 ページには簡易の対話内容 (例えば、「あなたの名前は何ですか?」、「家はどこですか?」、「何歳ですか?」等) がブヌン語のみで表記されている。特に解説や中国語訳などはない。20 ページ以降は巻末の「語彙集」となっており、上記の計 18 個のブヌン語関連アルファベット (音・表記) 毎にブヌン語の語彙 (例えば、犬、豚、芋、山、始める、～したい、口、火等。大部分は名詞) が中国語訳とともに整理されている (全 136 語)。本書では特に明記はされていないが、ブヌン語の発音および執筆者名から、北部方言 (タケトド方言、タケバカ方言) を扱ったものであると推測できる。

以上の内容から、1990 年代初頭の母語教科書・教材作成における試行錯誤の後を伺うことができる。当時すでにアルファベット表記のブヌン語聖書は出版されていたが、母語教育を進めようとした人々は、第一にアルファベットの理解とブヌン語の綴り方を一般のブヌンたちに理解させる必要性を強く意識していたことが分かる。現代の母語教科書・

教材（後述）と比較すると、方言差や文法などの説明がないことや、会話文の提示方式（中国語訳・説明の不在）など多くの欠点もみられるが、これもまた 1990 年代初頭の母語教育の状況を表していると言える。

## 2. 2 『布農母語読本』（首冊&第 1 冊）——基本形式・構成の構築

次に紹介するのは、花蓮県政府出版の教科書・『布農母語読本 首冊』である〔呂（主編）1995〕。主編者の呂必賢は、花蓮県卓溪郷で小学校教員・校長・郷長を歴任し、後のブヌン語関連教科書・教材の編纂においても主導的な役割を果たしてきた人物である。巻頭には花蓮県長（県知事）の「巻頭辞」として、花蓮県では「台湾省国民教育發展措置」（台湾省政府教育庁発布）に基づいて 1994 年から母語教材の編纂が開始されたことなどが述べられている。さらに「前言」では、同教材が花蓮県卓溪郷で使用されるブヌン語を主とし、「花蓮県政府母語教材実施要点」に基づき、基本的に李壬癸の「オーストロネシア語標準表記法」を採用して編纂されたもので、日常生活で使用する実用的な母語を重視し、学習補助としてリスニング用のカセット・テープを収録していることなどが箇条書き（中国語とブヌン語）で列挙されている。その後には「ブヌン語使用符号説明」の中で、ブヌン語の 5 大方言の差異が説明され、ブヌン語を表記する際に用いられる上記の母音・子音計 18 個の内の子音が、鼻音／破裂音／摩擦音などの調音法および両舌音／歯茎音／軟口蓋音などの調音点をもとにした表で、台湾で一般的な注音符号を併記し整理されている。さらに、ブヌン語の 3 母音が紹介され、代表的・特徴的な発音（b, d, q/h, s, ng, c, z 等）についても、ブヌン語彙の諸例が挿絵入りで説明されている。

本書（全 52 ページ）の主要部分は、「私の身体」、「私の家」、「私の学校」、「あなたは何をしていますか？」、「あなたは何を食べますか？」、「あなたはどんな動物が好きですか？」、「買物」、「果物が食べたい」、「数字を数える」、「交通手段」、「天気」、「あなたはどう思いますか？」と題された全 12 課の単元（各 3～5 ページ）である。各課の内容は、各課の主題に関連する単語（名詞・動詞・形容詞）を複数紹介し、練習問題の中で例文を提示し、枠の中に新出単語を挿入していくことで、多様な表現を身に付けさせるというものである。例えば第 2 課では、「あなたの 父／母／兄／妹／□ は誰ですか？」、「私の 父／母／兄姉／弟妹／□（の名前）は○○○と言います」といった例題・練習問題が用いられている。なお巻末には、本書に登場した主要単語一覧（索引全 157 語）がまとめられている。

筆者の手許には、同一の主編者・出版元による同名の教科書『布農母語読本 第 1 冊』もある〔呂（主編）1996〕。同書（全 72 ページ）は基本的に前作と同様の構成を採用しているが、いくつかの変更点がみられる。一つ目は「布農語使用符号説明」の箇所では、これまでの表記に追加して、単語の音節を分ける「'」、中国語の声調表記を援用した表記方法が提案されていることである。二つ目は各単元（課）の内容である。本書における各課（全 15 課）の主題は、「あなたの名前は何ですか？」、「お元気ですか？」、「童謡：

善人の在り方」、「あなたはどこに行きますか?」、「仕事」、「童謡:スモモがいっぱい」、「訪問」、「食事」、「童謡:雄鶏と鷹」、「結婚」、「看病」、「童謡:おじさんはどこへ行った」、「現金を引き出す」、「私の願い」、「ブヌンの服飾を知る」となっており、多くの課で「会話形式」の本文が採用されていることが特徴である。各課の構成は、①本文／②新出単語／③説明／④資料／⑤練習問題であるが、③／④が含まれていない課も多い。童謡が掲載された課では、ブヌンの童謡が楽譜・歌詞付きで提示され、続いて歌詞の内容説明・注釈が行われている。そして最後の第15課は、会話形式ではなく、ブヌンの服飾文化に関する叙述・説明文(ブヌン語)となっている。なお、前作と異なり巻末の語彙集などはない。

以上の二つの教科書・教材の内容からは、次のようなことが明らかになる。第一に、政府(台湾省)の政策や言語学者による正書法研究の成果、ならびにネイティブの教育関係者が参与することで、教科書・教材の内容が充実し、序文・概要説明、発音記号・表記法の説明、諸単元(単語／例文／練習問題)、語彙集という基本形式への定式化が試みられていることである。第二に、日常生活の諸場面を舞台として、新出単語の説明と例文・練習問題への取り組みという構成によって、ブヌン語の文法や諸単語に対する学生たちの理解が依然限定的なものであっても、その限られた語彙数と構文を通じて、多様なコミュニケーション形式を試みる可能性を学生たちに提供している。第三に、同様の目的意識から、『布農母語読本 第1冊』では会話形式の本文構成が試みられている。現代のブヌン学生の母語能力から言って難易度が高いと思われる内容も含まれているが、会話形式を通じた母語のコミュニケーション能力の向上という編集者側の意図が伝わる内容である。第四に、本文に続いて本文の内容および主題に関連するブヌンの歴史・文化に関する説明が行われていることも重要である。また、こうした単語や例文の説明の際には、学生たちの母語・文化理解を促進させるものとして、日本植民地期の写真や現代における祭祀活動・文化活動などの写真・挿絵も多く用いられている。これらの教科書・教材の編者たちが、母語教育を単なる言語教育としてではなく、歴史・文化教育、さらには文化継承の重要な契機としてとらえていることの表れである。

### 2. 3 『国民小学郷土語言教材』——「教科書／指導ガイド」形式の登場

教育部による母語教科書・教材編纂プロジェクトを受けて1990年代半ばに編纂されたこの教科書・教材シリーズの特徴のひとつは、個々の言語・方言および各学年の「学習手冊」(教科書)に合わせ、「教師手冊」(指導ガイド)が編纂されたことである。筆者の手許には、同シリーズのブヌン語篇の内、小学校3年生用教科書の指導ガイドと6年生用の教科書がある。これらをもとに、教育部主導のプロジェクトで編纂された教科書・指導ガイドの内容を紹介してみたい。

『国民小学郷土語言教材 布農語 教師手冊 第1冊(3年級)試用本』(全67ページ)[教育部(編)1997]では、編纂委員会による序文(中国語／ブヌン語)に続く「編集・使用説明」において、本書が教育部の国民中小学郷土語言教材編纂事務会議の決議



に基づくものであること、方言別に録音したカセット・テープが各教科書に付帯され、別に指導ガイドが用意されていること、学生の能力と母語教育の展望を考慮し注印符号とローマ字表記が併記されていること、方言差を考慮しつつも使用者が最も多いイシブクン方言を主とした内容になっていることなどが記されている。加えて「編集・使用説明」には、これまでの類似教科書と同様に、ブヌン語表記のためのアルファベットと注印符号との対応関係、発音例題の単語などをまとめた表が付されている。

小学校3年生を対象とした本書の各単元の内容は、①本文（会話形式および叙述形式）／②新出単語（ブヌン語／中国語訳）／③練習問題という構成になっている。全 10 課の表題はそれぞれ、「あなたはどこに行きますか？」、「私の家」、「あなたはどこで勉強しますか？」、「学習」、「鉛筆を借りる」、「美味しい食べ物」、「私の故郷」、「歌う」、「数える」、「美しい服」である。各単元に記載された③練習問題では、個々の単語に相当する写真・絵を選択する、アルファベットを繋げて単語を作る、中国語の単語に対応したブヌン語を選択するといった形式が採用されている。なお、巻末には付録として、「台湾原住民族族群簡介」・「認識ブヌン」・「ブヌンの伝統歌謡」と題した概説の文章、ならびに3曲の童謡が歌詞・楽譜（数字譜）付きで掲載されている。

本書は「指導ガイド」であるため、教科書にも登場する上記の①～③以外にも、各課内の個々の諸パートをどのように教えるべきかが丁寧に記されている。例えば、会話形式から構成される「第5課 鉛筆を借りる」では、教師が模範として本文を読んだ後に学生に復唱させる、教師と学生が役割を替えながら本文を読む、アルファベットの表記法（大文字／小文字）の説明といった教育方法が示されている。さらに各課内に収められた「発展活動」という項目では、重要語句を板書し学生に覚えさせる、発音練習の仕方、子音と母音を組み合わせてひとつの音・単語を綴る、本文に登場した構文を用いた作文練習（例えば、「A は B」等）、練習問題の模範解答などが記されている。なお、本書で登場する構文には、「A は～に行く（＋疑問文）」、「A は B である（＋疑問文）」、「A が～するのはどこ？」、「A は（数）ある？」、「A は（動詞）する」、「A は（動詞）が好き」、「A は（形容詞）であるBが好き」、「A がBに言うには～である」、「A のBは（形容詞）である」、「（数）人で（動詞）する」、「（数）のAが（動詞）された」、「A は（動詞）するつもりである」、「誰が（目的語）を（動詞）しますか？」などがある。

小学校6年生を対象として数年後に出版された『国民小学郷土語言教材 布農語 第4冊（6年級）試用本』（全 113 ページ）[全（主編）2000] は、南投県信義郷で中学校校長などを務める全正文（Lian Suqulman）が編纂し、言語学者の何徳華（静宜大学）や信義郷出身牧師・古老らから協力・訂正指導を受けて刊行されたものである。その序文および編集説明には、前書の内容に加え、本書のブヌン語表記方法が教育部発表の「オーストロネシア語標準表記法」（1994 年）<sup>5)</sup> と長老教会使用のローマ字表記を参考にしていること、音声教材として CD が用いられていること、本文内容が植民地期の日本人研究者による神話・伝説研究そして現代のフィールドワークの成果に基づいているこ

となどが記されている。なお、アルファベットによる音声表記の説明として、注印符号が併記され、また各方言における発音の差異・対応関係に関する説明もなされている。

本書は前書と同様に全 10 課からなるが、小学校6年生が対象ということもあり、本教科書の本文は、会話形式ではなく、ブヌン神話・伝承の叙述形式になっている。各課の表題は順に、「楽しい気持ち」、「播種祭」、「巫術師」、「タブー」、「狩猟」、「大洪水」、「クマとウンピョウ」、「ネズミ」、「イシブクンの人々」、「サル」である。例えば、「第4課 タブー」では、かつてのブヌン社会では獲物の肉を食する際、子供が食べてはいけない部位があったこと、粟収穫期の前にはクマ肉を食べてはならなかったことなどが紹介されている。同じく「第6課 大洪水」では、大蛇が川を堰き止めたため大洪水となって人々が山頂に避難し、最終的にはカニが大蛇を退治して水が引いたという伝説などが記されている。

各課の本文ではブヌン語がアルファベット表記され、各単語の下に中国語の逐語訳が、各段落の後方には段落の内容をまとめた中国語訳が挿入されている。通常2～3ページほどの本文（100 から 100 数十語程度）の後には、語義分析、読み上げ練習、構文練習などとして、重要単語が例文付きで紹介されている。それぞれ詳細な解説が付されているわけではないが、例えば構文練習では、数個の単語（動詞）を題材として複数（6つ）の例題が登場するため、動詞と主語・目的語の位置関係、現在形、過去形、未来形、受動態などを学べる構成になっている。さらに各課の後半には、個々の中国語に対応するブヌン語を選択肢の中から選ぶ、あるいはブヌン語の質問に対してブヌン語で答える、ブヌン語の例文の重要語句の空欄に中国語訳を書き込むなどの練習問題が掲載されている。ただし、本書の巻末には語彙集などは収録されていない。なお、本教科書・教材シリーズには、ブヌンの歴史や文化を説明する姉妹版として、『国民小学原住民郷土文化教材』シリーズがあり、こちらも第1～第4冊の教科書に対し、1冊ずつ指導ガイドが用意されている。

### 3. 母語教育政策充実期の教科書・教材——2000 年代初頭

前章でみたように、台湾の原住民母語復興において用いられる教科書・教材は、1990 年代後半から、飛躍的に進歩した。しかし、この時期の教科書・教材は、表記方法の不徹底、誤字脱字、中国語訳・説明の誤り、過度の伝統文化の強調と難解さ、非系統的な構成などの問題を抱えていた [cf. 黄 1995、2007; 林 2007]。2000 年代には、これらの問題点を踏まえ、全国的かつ諸地域・集団の言語・方言差を考慮した大規模な教科書・教材プロジェクトの成果として、以下の教科書・教材が登場することになった。

#### 3. 1 母語認証テスト用問題集

行政院原民会の指導の下、原住民諸語に対応して 2001 年に始まった母語認証テストの最初の実施団体となったのは、政治大学 ALCD であった。既に述べたように、同セ

ンターはテスト対策用練習問題集として『原住民族語練習題』（全 12 冊）<sup>(6)</sup>〔政治大学原住民族語言教育文化推展中心（編）2001a〕を出版した。ここではブヌン語用の問題集を例に、その内容を紹介してみたい〔cf. 政治大学原住民族語言教育文化推展中心（編）2001b〕。

この問題集に序文はなく、目次に続きブヌン語表記法対照表の説明が付されている。同表では、注音符号による説明もなく、教育部発表のオーストロネシア語標準表記法と国際表音文字（IPA）との対応関係が整理されている。全体で約 100 ページからなる本問題集は、母語認証テストの試験（方言）区分を基礎としつつも、イシブクン方言、タクバヌアズ方言（及びタケバカ方言、タケヴァタン方言）、タケトド方言の3部（南部 / 中部 / 北部）に分けて練習問題を提供している。以下ではイシブクン方言に対応した「部」を紹介する。

各「部」は大きく「Ⅰ．筆記試験対応」および「Ⅱ．面接試験対応」に分かれる。前者はさらに、①選択問題／②正誤問題／③穴埋め問題／④組み合わせ問題／⑤並べ替え問題／⑥説明問題に区分され、後者も①文章朗読／②会話（質問／応答）／③即興談話に分けられている。「Ⅰ．筆記試験対応」の選択問題では、ブヌン語の語彙力を問う問題が 300 問ほど並ぶ。続く、正誤問題はブヌン語の短文が正しいかどうかを問う内容（約 50 問）、穴埋め問題はブヌン語の短文の空欄に動詞・助詞・助動詞などを選択肢なしで埋めるもの（約 50 問）、組み合わせ問題は左右二列に並んだブヌン語を線で連結して（形容詞＋名詞、動詞＋目的語等）単語・短文を作る内容（計 34 問）、並べ替え問題は数個のブヌン語を並べ替えて作文するもの（計 23 問）である。最後の説明問題は、ブヌン語の単語をブヌン語で説明するという内容である（計 10 問）。以上の筆記試験対応の問題群の末尾には（説明問題を除き）、各問題の解答が付されている。全体を改めてみると、冒頭の選択問題は語彙力を、正誤問題～組み合わせ問題は単語の構成能力を、並べ替え問題と説明問題は文法理解力と作文能力を問う問題として整理することができる。

「Ⅱ．面接試験対応」の文章朗読は、60 語～ 100 数十語程度から構成されるブヌン語の文章を朗読するものである。続く会話（質問／応答）は、ブヌン語の疑問文・質問文（「あなたの苗字は何ですか？」、「あなたのお仕事を教えてください」等）に対してブヌン語で答える内容である（計 24 問）。即興談話は、与えられたブヌン語の主題（例えば、「お酒の良し悪しについて」、「もしあなたが村のリーダーになったら、まず何をしますか？」等）に対して、受験者の自説をブヌン語で述べるものである（計 9 問）。「Ⅱ．面接試験対応」の内容の内、文章朗読では原住民言語の発音能力と文章理解能力を、会話ではコミュニケーション能力を、即興談話では以上を踏まえた総合的なブヌン語能力が問われていると言えるだろう。以上の構成と各種設問のポイントをまとめたのが次の表である。（表 2）

なお、個々の方言によって各設問の問題数は異なるが、問題形式は基本的に以上で

紹介したイシブクン方言のものと同様である。巻末に索引・語彙集などは付されていない。

表2 『母語認証テスト』用問題集（ブヌン語）の構成

I 筆記試験対応問題		ポイント／学習過程
1	選択問題	(A) 語彙力 ↓
2	正誤問題	(B) 語彙構成能力 ↓
3	穴埋め問題	(B) 語彙構成能力 ↓
4	組み合わせ問題	(B) 語彙構成能力 ↓
5	並べ替え問題	(C) 文法理解力、作文能力 ↓
6	説明問題	(C) 文法理解力、作文能力 ↓
II 面接試験対応問題		ポイント／学習過程
1	文章朗読	(D) 発音・文章理解能力 ↓
2	会話（質問／応答）	(E) 会話能力 ↓
3	即興談話	(F) 総合的言語能力

出典：政治大学原住民族語言教育文化推展中心（編）[2001b] をもとに筆者整理

### 3. 2 「国民中小学九年一貫課程」用教材（「九階教材」）

先にみたように、教育部と行政院原民会からの委託を受けて編纂されたのが、政治大学 ALCD による全国版の母語教科書・教材（九階教材）であった[政治大学原住民族語言教育文化研究中心（編）2006]。以下でも、ブヌン語イシブクン方言の教科書を具体的な対象とし、本シリーズの内容と特徴を紹介してみたい。

各教科書の冒頭の編集説明には、同シリーズが国民中小学九年一貫課程に関する教育部の基本理念・大綱、ならびに教材細目編集小委員会が定めた族語教材課程大綱と各段階の教科書の教材細目に依拠して編纂されたものであることが明記されている。また同編集説明では、本教科書・教材シリーズの特徴として、教科書に合わせた指導ガイドの編纂、日常生活における実用性やコミュニケーション能力の向上という母語教材編纂の目標、平易から難易そして反復という学習プロセスを重視した内容、行政院原民会発表の「原住民族言語表記システム」（2005 年）<sup>(7)</sup> に依拠した母語表記法、巻末の DVD および ALCD ホームページにおける同教科書の内容の提供（ダウンロード可）などが記されている<sup>(8)</sup>。

上述のように、本教科書・教材シリーズにおける各方言（全 40 種）の教科書構成は、その発展段階に応じて、第1段階～第9段階に分かれている（9冊の教科書、それに対応した9冊の指導ガイド）。各段階の教科書は通常それぞれが3～4の課を含んだ3つの

単元に分かれており、1冊の教科書は全 10 課によって構成されている。各課の本文は、全体で3～7行ほどの会話文からなっている。例えば、ブヌン語イシブクン方言第1段階第1課「ありがとう」の本文は、「生徒:こんにちは」、「教員:あなたは元気ですか?」、「生徒:元気(良い)です」、「教師:みなさん元気ですか?」、「生徒:みんな元気です。ありがとうございます」といった会話形式の内容である。教科書には本文に加え、本文中で登場した新出単語が整理され、さらに本文の内容に関連した挿絵が練習用として掲載されている。各課の内容には中国語訳や詳細な解説などはないが、巻末には各課の本文と中国語訳、各課の新出単語、さらにはアルファベット順に整理された本書全体の語彙集が掲載されている。

全 40 方言にわたる九階教材において、「段階(階)／単元／課／本文」という構成、ならびにそれぞれのレベルにおける主題は、各族・方言の特徴に応じて多少の調整はされているものの、基本的に全て統一されたものである。第1段階では比較的に会話文が多いが、段階が上昇するに従い多くの叙述文が登場する。例えば、第1段階第10課「赤い本」の本文は4行・18語からなる会話文だが、第9段階第8課「祭祀」の本文では、5行・39語の叙述形式でブヌンの一般的な儀礼の様子、祭祀場、供物、儀礼のプロセス、終了後の宴といったトピックを説明している。次の表は、各段階の基本テーマと単元の名称そして各課の主題を整理したものである。(表3)

表3 『国民中小学九年一貫課程 原住民語教材』の構成(例:ブヌン語イシブクン方言)

階	基本テーマ	単元	各「課」の主題
1	自己と人間関係	1.1 学校に行く	こんにちは(祝福語)／私は学生です／起立!
		1.2 私の友達	あなたのお名前は?／私たちは女性です／私の犬
		1.3 教室の中で	先生はどこ?／これは何?／私のお母さん／赤い本
2	家とコミュニティ	2.1 暖かい家庭	私の家(家族)／ご飯を食べる／私は5歳です
		2.2 私の村	あなたの家はどこ?／私は台東から来ました
		2.3 大自然	山と川／太陽が出た／雨が降った／雲と虹／畑
3	学校と社会	3.1 学校生活	私の友達／先生の教え／授業が終わった／熱発／運動
		3.2 学校での音	歌と踊り／いま何時?／電話をかける
		3.3 日常生活	お祖父さんを訪ねて／私は絵を描く
4	時間と自然	4.1 昼と夜	陽が落ちて／太陽が昇った／午後
		4.2 誕生日おめでとう	おばあちゃんの誕生日／誕生日／願い
		4.3 季節と気候	日曜日／夏／台風／秋
5	運動と交通	5.1 汗と収穫	アリ(蟻)／徒競走／収穫
		5.2 交通手段	自転車／列車に乗る／路上で
		5.3 山と海	台湾の山／道を訊ねる／海／漁業



6	食品と健康	6.1 私たちの飲食	ただいま／好きな食べ物？／食堂
		6.2 美味しい果物	果物／果樹／冷蔵庫
		6.3 健康な身体	虫歯／褒める／昼食／転ぶ
7	計算と生活	7.1 買い物	あなたは何を買う？／両替／貯金
		7.2 時計	時計／時間厳守／お母さんの一日／
		7.3 動物園	羊が一匹足りない／蛇／蝶々／猿のお尻はなぜ赤い？
8	知識と学習	8.1 言語と民族	私はブヌン語が話せる／僕らはブヌン／昔話
		8.2 閲読の楽しみ	読書／本を借りる／本を買う
		8.3 手紙を書く	手紙を書く／従兄への手紙／日記／郵便
9	伝統と現代	9.1 祖先の知恵	分かち合う／古老の話／口琴
		9.2 村と都市	私たちの村／現代の施設／都市原住民
		9.3 祭りと祝祭日	射耳祭／祭祀／結婚／卒業式

出典：政治大学原住民語言教育文化研究中心（編）[2006]をもとに筆者整理

他方で、各段階の教科書に対応した指導ガイドには、教科書と同様の内容に加え、各課の「教育目標」、「教育準備」、「教育要領」、「教育活動への提言」といった諸項目が追加されている。例えば、指導ガイドの第5段階第3課「収穫」では「教育目標」として、「農家の苦労を叙述できる」／「本課で提示された構文を聴き話すことができる」を含む計4つの目標が掲げられ、「教育準備」の項では授業に際して準備する道具類（CD ラジカセ、単語カード、課のテーマに関連する図・写真等）などが挙げられている。指導ガイドにはさらに、教科書の本文や練習問題にはない中国語訳が付されているだけでなく、「教育要領」や「教育活動への提言」には学生の興味関心を喚起する方法、講義プロセスの詳細、学生たちに会話練習をさせる場合の方法、本文内容に関連した伝統文化の説明など、詳細な指導要領・教授法が記されている。

当事者の一人として九階教材の編纂に携わった政治大学の林修澈教授（当時、主任）は、その編集理念と作成過程を整理した論考において、九階教材の特徴として、①話者の主体性（少数言語への配慮）と生きた言語の尊重、②現代生活の重視、（②と連動した）③造語の活用と言語構造の新たな発展、④平易から難易への段階的発展、⑤挿絵と余白を用いたレイアウトの工夫、⑥大規模な編纂スタッフ組織の六つを挙げている [林 2007 : 231-233]。このうち①から④は、これまでの教科書・教材類と比較して最も野心的な試みだと言えよう。特に②（および関連する①・③）は、伝統的な言語使用や文化継承を重視する人々から多少批判も受けたようであるが、失われ行く言語をいかにして復活・存続させるかという問題に対するひとつの戦略・スタンスとして理解することができる [cf. 李 2007]。

### 3. 3 進学用母語能力テスト問題集

進学用母語能力テストは、原住民籍の学生が高校・大学などに進学する際に 35%の加点をする条件（母語能力の確認）として、2007 年より始まった。同能力テストの対策用として編まれたのが、前述の「進学用母語能力テスト問題集」（全 13 言語 43 方言）であった。この問題集は、「Ⅰ.リスニング試験」（正誤問題 / 選択問題（1） / 選択問題（2） / 組み合わせ問題）、ならびに「Ⅱ.口述試験」（簡単な会話問題と図・絵の内容をもとにした談話能力測定）という実際のテスト形式・内容（表 4）への対策として、「①基本語彙」、「②生活会話百構文」、「③模擬試験」、「④練習問題」によって構成されている。なお巻末には、同問題集の音声データを収録したCDが添付されている。以下では、やはりブヌン語イシブクン方言の問題集を事例として、その具体的な内容をみていくことにしよう [cf. 行政院原住民族委員会 2009]。

「①基本語彙」は、数字、代名詞、疑問詞、親族（語彙）、身体語彙、動物・植物、自然、時間、動詞・形容詞などの基本語彙を整理したもので、計 217 個の単語が収録されている。続く「②生活会話百構文」は、「こんにちは?」、「ご機嫌いかがですか?」、「さようなら」など挨拶語をまとめた「1. 挨拶・離別用語」、5W1H に相当する基本的な疑問文形式をまとめた「2. 疑問構文」、「A は B である（ではない）?」、「いま～している（していない）?」などの疑問文とその応答を中心とした「3. Yes / No 構文」、「～しなさい / してはいけません」といった学校現場で用いられる使役・命令表現に関する「4. 使役構文」によって構成される。以上の内容はいずれも、複雑なブヌン語表現や生業や祭祀といった伝統的な生活を表現するものとしては必ずしも十分ではない。しかし、日常生活で最低限必要な頻出語彙および表現方法を習得できる内容となっている。

「③模擬試験」は、進学用母語能力テストの出題内容（過去問／模擬試験問題）を掲載したものである。例えば、筆者の手許にあるブヌン語イシブクン方言用教材の第3版では、2007 年に初めて実施された進学用母語能力テストの過去問ならびに模範解答が載せられている。「リスニング試験」中の「正誤問題」は放送される音声と試験問題の絵が合致しているかを問う問題、「選択問題」（1）および（2）は放送されるブヌン語の文章に対応する絵や文章を選択肢から選ぶ問題である。それに続く「組み合わせ問題」は、ブヌン語で読み上げられる会話文（疑問／応答、等）に対応した絵を選択肢から選ぶという内容である。模擬試験の最後は、「口述試験」に対応したもので、ひとつ目の「簡易対話」は放送される5つのブヌン語の文章（肯定文／疑問文）への応答を、受験者自身が所定の機器に録音するという内容である。続く「図・絵談話」は、与えられた4枚の図・絵の中から1枚あるいは複数枚を選び、設問に応じて文章・談話を展開する（所定の機器に録音）というものである。なお、「④練習問題」では、進学用母語能力テストの出題形式に応じ、上に挙げた各種類の設問の練習問題がそれぞれ数十題ずつ用意されている。

表 4 進学用母語能力テストの出題形式

I リスニング 試験		ポイント／学習過程
1	正誤問題	(A) 語彙力、(B) リスニング力 ↓
2	選択問題（1）	(A) 語彙力、(B) リスニング力 ↓
3	選択問題（2）	(A) 語彙力、(B) リスニング力 ↓
4	組み合わせ問題	(C) 文法理解力、(B) リスニング力 ↓
II 口述試験		ポイント／学習過程
1	簡易対話	(D) 発音・文章理解能力、(E) 会話力 ↓
2	図・絵談話	(D) 発音・文章理解能力、(E) 会話力

出典：行政院原住民族委員会 [2009] をもとに筆者整理

#### 4. その他の教科書・補助教材——地域での取り組みとデジタル教材

先の数章でみたように、台湾では 1990 年代半ばから、さらには 2000 年代に入ると、教育部や行政院原民会の主導の下、多くの全国的な教科書・教材が編纂されてきた。また、近年では、これらの政府機関の施策や補助事業によって [cf. 趙 2011：第2章第4節]、多くの紙媒体あるいはデジタル教材が生み出され、公開・提供されている [cf. 石垣 2015：第3章]。本章では、やはり主としてブヌン語イシブクン方言の事例に注目しながら、これらの具体的な内容をみていくことにする。

##### 4. 1 語彙集・辞書他の補助教材

初めに紹介するのは、台湾キリスト長老教会の下部組織である台湾族群母語推行委員会（2001 年～）<sup>9)</sup> が発行する母語関連教材シリーズに含まれる3冊のブヌン語教材である。一冊目は花蓮県出身のブヌンである Manias Istasipal 牧師編の『布農族語詞彙集』[Manias Istasipal（主編）2006] である。同書はタクバヌアズ方言を主とした内容で、関係者による序文と目次に続き、表音記号、単語発音練習、常用語彙、数詞、地名、クラン（氏族）名、他民族の名称、人名の全8単元によって構成されている（付：参考文献）。収録単語は約 500 語である。同書では、行政院原民会発表の表記システム（2005 年）を基にしたとするアルファベット表記を用い、中国語の語彙に同アルファベット表記のブヌン語が併記されるという形式を採用している。収録された単語の多くは、参考文献にも挙げられた九階教材に掲載されたものと大枠では同様である。ただし、ブヌン諸集落の母語名称、社会制度や族内のサブグループ（≒方言集団）、そして周辺諸民族の名称やブヌン男女の個人名リストが挙げられている点が、伝統文化・宗教とキリスト教信仰との関係を長年にわたって議論してきたキリスト長老教会による出版物の特徴だと言えるだろう。

二冊目の『布農族語読本』は [Anu Ispalidav（主編）2008]、これまでも数々の母語教科書・教材の編纂に携わってきた南投県信義郷出身の Anu Ispalidav 牧師編で、

ブヌンの一大勢力であるイシブクン方言に焦点を当てた内容である。「読本」と銘打ち、ブヌン語概要、表記システム、レッスン（全 20 課）、語彙集、接頭辞／接中辞／接尾辞、付録（代名詞表／記号／参考文献）を網羅するスタイルを採用している。前半の数課の内容に、初級者にとっては多少不慣れだと思われる単語（例えば、「*mablaz*（完全・明瞭な）」、「*aikasangan*（理想・希望）」）が登場するが、本文の長さや内容は決して難解ではない。しかし、後半の課では文章量も多く高難度の叙述文が登場する。さらに各単語の説明やその構造分析そして伝統文化の詳細に触れており、中級・上級者を対象とした内容である。こうした特徴は、巻末に掲載された「接頭辞／接中辞／接尾辞」の説明（約 20 ページ）にも反映され、編者の分析的な母語研究の成果と言える。三冊目の『認識布農語基本構詞』もまた Anu Ispalidav 牧師編で、より多くの単語の構造を分析したものである [Anu Ispalidav（編）2012]。なお、長老教会の下部組織による出版のため、巻末の付録には「主の祈り」、長老教会が定めた「信仰告白」、「使徒信教」、そして「八福の教え」が、ブヌン語と中国語を併記するかたちで掲載されている。

近年は長老教会主導以外でも、個人や地域の教育関係者・古老らが協力して編纂した語彙集や辞書が増えている。例えば台東県政府が出版した『布農族語言辞典』は、長年にわたって台東県延平郷の小中学校で教育に従事してきた胡金勝（Salizan Is-tanda）が編纂したものである [胡（主編）2012]。全 227 ページの同書には計 1 万語余のブヌン語が中国語訳付きでアルファベット順に収録されている。個々の単語の構造（語幹、接頭辞／接中辞／接尾辞等）に関する説明や用例がなく、また逆引きができないのも残念であるが、社会・文化生活の変化とともに現在ではあまり使用されなくなった語を含む 1 万語を網羅している点で、ネイティヴ編の極めて価値の高い辞書であると言えるだろう。

他方で、同じく台東県延平郷にある桃源小学校の鄭漢文校長（漢族）が進める小学生向けの語彙集も数年前から編まれている。1 作目の『布農族字典』は同郷の古老 Tahai Palalavi が中心となったもので、常用のブヌン語約 1,800 語が収録されている [Tahai Palalavi 2012]。初級者向けで語彙数は多くないが、個々のブヌン語に中国語訳を付すだけでなく、簡単な用例（付：中国語訳）を載せている点が、この語彙集の有用性を高めている。なお同書には、続編となる『布農文化辭條』もある [胡（編）2014]。こちらはブヌン文化に関連したタブーや倫理を扱ってはいるが、やはり初級者・小学生対象ということで、100 語の基本単語および関連した短文を掲載している。ただし、各基本単語に関連した常用単語も中国語訳付で 10 個前後紹介されており、それらの総計は 1,100 語余に及ぶ。1 ページ＝1 短文＝関連単語紹介となっており、余白や基本単語に関連した挿絵も掲載され、子供たちの興味・関心を誘う内容である。両書とも、コンパクトな形状（タテ 16cm×ヨコ 15.5cm）にも関わらず基本単語および短文、さらにはブヌン文化に関する基礎的な情報がまとめられており、母語使用の機会が減っている 40 代以下の父母や青年世代にとっても、十分に有用な語彙集だと言える。



#### 4. 2 その他のデジタル教科書・教材

台湾の原住民母語復興プロジェクトでは、カセット・テープ、後には CD などを用いて教科書・教材に音声データや教材コンテンツ自体を添付するだけでなく、近年はこれらのデータをネット上で公開するスタイルを採用してきた。前稿でも触れたように、母語教科書・教材コンテンツを扱ったサイトは、行政院原民会主導や大学・研究機関などが運営するものなど、さまざまである。本稿ではこれらのサイトのうち、デジタル教材の種類・内容が最も充実し、かつ特徴的な役割を果たす4つのサイトについて、さらに踏み込んでその内容を紹介したい。

一つ目は、行政院原民会が運営する原住民諸母語の学習のための総合サイト、「原住民族語 E 楽園」である<sup>(10)</sup>。このサイトでは主に、原住民の古老・母語教師・母語テスト受験生・母語学習初心者を対象とし、母語学習教科書・学習教材などの公開、さらには関連イベント情報の広報などを行っている。本サイトに掲載された教科書・教材には、初心者向けの発音記号学習（音声付き）・タイピング練習、進学用母語能力テスト問題集などを基礎とした中学生・高校生向け学習コーナー（基本語彙、生活会話百構文、絵・図理解、選択肢問題等）、本稿でも取り上げた九階教材、童謡・民謡（歌詞・音声付き）、物語・童謡・母語会話スキットの動画集などがある。特筆すべきは、母語教育の利便性を考え、これらの教材の大部分が画像・音声を含め同サイトからダウンロード可能になっていることである。同サイトには他にも、原住民諸語のイマージョン式（没入式）母語教育、極少マイノリティ言語の復興、語彙力競技会、母語絵本編纂などの取り組みに関する内容、そしてサイトの運営主体である「族語数位中心」（原住民母語デジタル・センター）の活動が掲載されている。

二つ目の「原住民族語言能力認証測驗」<sup>(11)</sup>は、2014 年から実施された同名の母語測定テストの公式サイトである。同サイトでは、16 族 42 方言を対象として実施される母語測定テストの受験者に、受験関連情報や学習サポート、そして模擬試験問題などを提供している。具体的には、4つの試験レベルに対応した試験問題形式が示され、特に初級（高校進学用）・中級（大学進学用）の筆記試験用として、オンラインでの模擬試験が可能となっている。これに加え、初級・中級用（中学生・高校生向け）の学習サポートとして、上記「原住民族語 E 楽園」と同様に、進学用母語能力テスト問題集の内容などを基礎とした、基本語彙や生活会話百構文そして絵・図理解などの教材が掲載されている。

同サイトの機能はこれだけにとどまらない。上述の原住民族語 E 楽園がそうであったように、同サイトが掲載する教材の大部分は、ダウンロード可能となっている。それらのデータは、PDF や Word ファイルに限られたものではなく、特に初級・中級の教材内容に関しては、インターネット環境が整備されていないコンピューターでも同サイト内と同様の母語学習が可能となるよう、画像・音声データなどが一つのソフトとしてダウンロード・活用できるように整備されている。なお、本サイトに掲載されている初級・中級の学習サポー

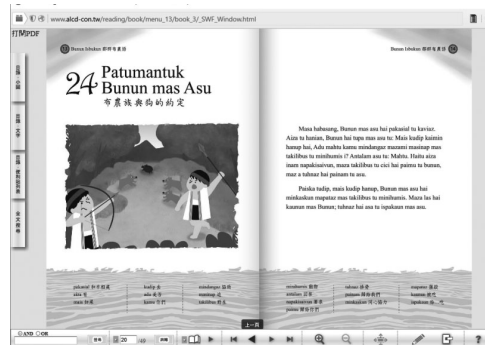


ト機能については、母語学習の利便性・ユビキタス性の向上のため、スマートフォンやタブレット型パソコンにダウンロードして用いるアプリケーションも用意されている。

三つ目に紹介するのは、政治大学 ALCD が改めて行政院原民会の委託を受け、2014 年9月にネット公開した『原住民族語中級教材——閱讀書寫篇』である〔政治大学原住民族研究中心（主編）2014〕。原住民諸語話者の古老・牧師・教員や言語学その他の専門家、計 100 人余りを投入して2年がかりで編纂された同教材については、日本でも言語学者の月田尚美による紹介がある〔月田 2014〕。ここでは、月田の紹介を踏まえ、改めて筆者なりにその内容を整理しておきたい。同教材は、政治大学 ALCD 他が公開してきた九階教材その他の初級教材を学び終えた人々を対象に、特に「読み」・「書き」能力の向上を目的とし「中級者用」に提供されたもので、紙媒体ではなく電子ブックとして公開されている<sup>(12)</sup>。14 族 42 方言の教材が、それぞれ上冊・中冊・下冊（各 10 課、計 30 課）用意され、その総計は 126 冊に上る。各課の構成は、本文（原住民諸語／中国語）、新出単語およびその中国語訳、本文の作者や趣旨さらには文化的背景を解説した「文化点滴」、そして学習の方法を示した「学習活動」であり、本教材自体には詳しい解説などは含まれていない<sup>(13)</sup>。各教材の本文内容は、言語・生業・伝統文化、伝説・神話、文学作品や散文、聖書の内容や広告、童謡・民謡など、極めて多岐にわたる。

九階教材との相違点として特に強調すべきは、今回の教材シリーズでは、個々の方言・教材の担当者たちがある程度自由に各課の本文を選択していることである。これは、各課の構成や本文が基本的に規格化されていた九階教材とは大きく異なる点であり、それが本教材の豊かなバラエティを生んでいる。本文の内容、新出単語をクリックすると原住民諸語の音声を確認できること、目次その他のツールバー機能を用いて現在のページから希望する箇所への移動、付箋貼り付け、メモ書き、本文検索などもまた、電子ブック形式を利用した本教材シリーズの特徴・利便性と言えるだろう。なお、本教材シリーズもまた、PDF 形式だけでなく、アプリケーションをダウンロードしてスマートフォンやタブレット型パソコンで使用することも可能である。（写真2）

写真2 『原住民族語中級教材——閱讀書寫篇』（13. 郡群布農語、下冊）



出典：「原住民族語中級教材——閱讀書寫篇」

<[http://www.alcd-con.tw/reading/book/menu\\_13/book\\_3/\\_SWF\\_Window.html](http://www.alcd-con.tw/reading/book/menu_13/book_3/_SWF_Window.html)>

最後に、近年多くの成果が生み出されている母語辞典のデジタル版についても、その詳細を述べておきたい。2013 年 8 月に開設された「原住民族 族語辞典数位化平台」<sup>(14)</sup>では、2007 年に始まった原住民諸語辞書編纂プロジェクトの成果を公開している。同プロジェクトでは、15 種<sup>(15)</sup>の辞書編纂を完了し、すでに7つの原住民母語（ヤミ語、ブヌン語、タロコ語、サイシャット語、サオ語、ツォウ語、カナカナブ語）のデジタル・データ（辞書検索と音声データ）を同サイト上で掲載している。同サイトに掲載された「ブヌン語イシブクン方言辞典」（「布農語郡群方言詞典」）を例にとると、それは言語学者の鄭恆雄が、同プロジェクトにおいてネイティブの古老・牧師・教師らの協力によって編んだ成果〔鄭（主編）2010〕を、データベースとして同サイトで検索・閲覧できるようにしたものである<sup>(16)</sup>。同様の検索機能はブヌン語以外の6つの言語でも提供されており、一つの単語（各原住民語／中国語）を検索すると、同語の意味、語根、品詞、関連語句、方言差、例文、単語の構造説明などが表示され、単語や例文は音声で確認することもできる。検索の結果として表示された原住民語をクリックすることで、その語句の説明ページが開くようにも設定されている。また、デジタル・データベースの特徴を活かし、同サイトでは、上記7言語の単語を一括検索することも可能である。加えて、同サイトに掲載された個々の辞書データベースは PDF 形式で全文をダウンロードすることができる。ブヌン語辞書の場合、2,000 種の基本語彙、そこから派生する 5,000 種の関連語、1 万種以上の例句・例文から構成されており、中には植物・動物や宗教信仰関連のカラー写真が 200 幅余り収められている。なお、同サイトにはこの他にも、言語毎の「オンライン理解度測定」（一問一答形式）や「拡張学習」として関連サイトの紹介、さらには母語学習者間の交流を促進する「交流討論」のコーナーが設けられている。

## おわりに

本稿では、台湾原住民の母語復興運動が進む中で編まれてきた教科書・教材を、その編纂過程や具体的な内容に注目しながら、時代的な展開に従って紹介してきた。その特徴を整理するならば、以下の諸点にまとめることができる。

第一に、台湾における原住民母語の教科書・教材編纂の歴史は、①地域的かつ試験的な取り組みが行われた勃興期（1990～1994 年頃）、②政府からの補助を受けた活性化期（1995～2000 年頃）、③全国規模でのテストの実施や教科書・教材編纂が行われた充実期（2000 年代初頭）、④補助・デジタル教材編纂の活性化期（2010 年前後～現在）に区分することができる<sup>(17)</sup>。しかし、台湾における原住民母語復興の動きは、決して当初から計画的に進んできたわけではない。初期における個人や各学校・地域レベルでの試行錯誤があり、それが台湾全体の多言語・多文化主義的な政策転換を後ろ盾としながら、言語学者だけでなく原住民の古老・教員・キリスト教会関係者・郷土史家などを巻き込んだ全国的な教科書・教材の編纂・提供へと進み、現在では多くの教科書・

教材をデジタル形式で提供するに至っている。

第二に、こうした試行錯誤は、これまでに編纂・出版された教科書・教材内容からも明らかである。初期の教科書・教材は極めて初歩的なもので、内容の統一性や段階的な教育プログラムの観点は依然として弱かった。それでも、政府の多言語主義政策によって補助を受けた教科書・教材が編纂される頃から、序文・概要説明、発音記号・表記法の説明、諸単元（単語／例文／練習問題）、語彙集、索引、あるいは各単元・課における会話形式の本文や伝統文化の解説などの基本形式がみられるようになってきた。しかし、そこには言語・文化継承を重視するあまり、歴史や文化に関する難解な内容を盛り込みすぎるという問題、また表記法の不統一や誤字脱字などのミスも多くみられた。これらの欠点を補うべく編まれたのが、発展段階に応じた体系的な母語教育・学習、現代生活における母語使用を重視した政治大学 ALCD による九階教材であった。この教材に対しても表記システムの不徹底や表現・翻訳ミスなどが指摘され、また現代生活における母語使用の強調（時に外来語の借用や造語使用）や規格化された各課程の内容に対しては、「漢族的な思考」あるいは「原住民諸語の破壊」といった批判が寄せられた [cf. 林 2007 : 235-236]。それでも、14 族 40 方言を網羅し現代生活への適応を強調した同教材のスタンスは、その後の母語教科書・教材の編纂の基礎となっている。

第三の特徴は、母語教科書と合わせて指導ガイドが編纂されてきたことである。政府補助を受けて 1990 年代半ばに編纂された『国民小学郷土語言教材』、政治大学 ALCD による九階教材、そして 2014 年にネット上で公開された『原住民族語中級教材』のいずれにも指導ガイドが用意され、例えば、九階教材の指導ガイドには、各課の趣旨、教育目標、教育準備、時間配分、本文内容の分析・詳説、構文練習、実際の教育方法、関連する民族文化の説明などが、細かく記されていた。無論こうした手法は、小中学校における「郷土教学」さらには「郷土言語」学習のカリキュラム化という言語政策の大転換から要請されたものであった。そこから、郷土語・母語教育の実質的な効果をいかに高めるかという教育・教授法的な問題意識と、母語教師の育成という急務への対処を迫られた政策立案者・教材編纂者たちの危機感を読み取ることができる。

第四に、こうした問題意識や危機感は、九階教材と前後して登場した母語認証テスト用や進学用母語能力テスト用の問題集の内容にも反映されている。両テストの内容は、その出題形式に多少の違いはあるものの、基本的には語彙力、単語構合力、構文理解、基礎会話能力、文章理解、文章朗読、図・絵の説明・論述などの諸点から母語の能力を問うものであり、問題集の内容自体もこれらの設問形式に対応したものであった。しかし、これらの問題集の内容は、単なる練習問題・模擬試験内容の提供に止まるものではなかった。これらの構成を、逆に母語学習あるいは言語能力の向上という視点から改めて捉え直すと、そこには①語彙力（および語彙構成能力）→②構文理解／文章作成能力→③リスニング能力／発話（会話）能力という、一般的な言語能力の習得・構築プロセスと連動した基本構成が浮かび上がる。これらの教材で扱われているのは初歩

的な語彙や日常生活に関連した諸構文ではあるが、一連の練習問題を反復学習する中で、受験者が個々の原住民言語の基礎的能力を身に着けることは十分に可能である。この意味で、これらのテスト対策用問題集は通常の母語学習教材としても、十分に機能的な構成になっていたと言えよう。

第五に、補助教材の充実とデジタル教材の活用という点を挙げることができる。前稿ならびに本稿第4章でみたように、近年の台湾においては、読本・語彙集・辞書といった数多くの母語学習のための補助教材が編纂されている。政治大学 ALCD が教育部や行政院原民会から委託を受けて作成した九階教材や二つの母語関連認証テスト問題集と同様に、これらの編纂作業において実質的な役割を果たしたのは、言語学者はもちろんのこと、原住民の古老／教員／教会関係者／郷土史家などであった。複数の外来政権による統治は、母語に限定されない多言語状況（日本語、閩南語、国語〔標準北京語〕）を生きることを原住民たちに強いたが、それは逆に母語使用の維持・継承のためのさまざまな挑戦を人々に促した。また、母語復興という挑戦、さらに遡って母語の記録・保存において、伝統文化と新たな宗教・信仰との関係性という問題を議論してきたキリスト教関係者が果たしてきた役割も無視することはできない。

これらの人々によって編纂された補助教材は紙媒体で印刷・配布されているが、他方で、行政院原民会が政治大学 ALCD に直接委託して作成された教科書・教材の多くが、母語学習関連サイトにアップされ、多くの原住民諸語学習者に提供されている。1990 年代初頭にはカセット・テープ形式であったリスニング教材も、その後 CD 形式へと移行し、現在ではネット上での提供が一般化しつつある。近年はさらに、スマートフォンやタブレット型パソコンでも利用が可能となっており、台湾の原住民諸語の教育・学習をめぐる環境は、学習意欲さえあれば地球上のどの場所に居ようとも学習が可能なユビキタス性を学習者に提供するに至っている。原住民母語復興の状況に限ったことではないが、こうした状況からは、先進的な技術や制度を貪欲に取り入れてトライ&チェックを繰り返す、台湾における諸政策の臨機応変さと「プラグマティズム」も浮かび上がる。

以上で見てきたように、台湾の原住民母語復興運動における母語教科書・教材の内容は、1990 年代初頭からの 20 数年間で飛躍的な進歩を遂げた。その教育的配慮や教科書・補助教材などの内容はもちろんのこと、その利便性と多様性は世界の他地域の状況と比較しても、極めて先進的なものだと言える。ただし、前稿でも指摘したように、こうした先進的な取り組みや充実した教科書・教材が実際にどのように母語教育の現場で使用され、どれほどの実質的な成果を生み出しているのかという問題を論じるためには、現地でのフィールドワークを通じた検証が必要である。この点に関しては別稿において、台湾中西部の南投県信義郷ならびに東南部の台東県延平郷における母語（ブヌン語イシブクン方言）の具体的な教育状況をもとに、検討を試みる予定である。



## 謝 辞

本稿で取り上げた初期のブヌン語教科書・教材のいくつかは、筆者が 1999 年に台湾でフィールドワークを開始した当初に、母語教育に携わるブヌンの先生方から頂いたものである。また、本稿の執筆に先立ち、台湾大学への留学経験をもつ沖縄県職員の久部良和子氏に政治大学 ALCD から贈られた九階教材（第1段階～第5段階。指導ガイド付で、計 400 冊）の管理が、筆者に任されることになった。政治大学 ALCD からは、筆者が 2015 年夏に同センターを訪問した際にも、複数の母語教育関連資料を頂いている。関係各位に感謝するとともに、本稿の内容が台湾以外の地域で少数者言語・方言の復興を目指す人々に僅かでも益するものになればと願っている。

## 注

- (1) 後者については、さらなる現地調査を踏まえた上で、別稿で論じる予定である。
- (2) 林修澈は、「九階教材」編纂の経緯と内容について論じている。高清菊は同・サイシャット語版を、許韋晟は同・タロコ語版をそれぞれ取り上げ、その問題点（表記法の不統一、誤訳、説明不足、民族文化と本文内容の齟齬、不適当な挿絵等）を指摘している。
- (3) かつて台湾中部山地を勢力範囲とした人々で、現在では約 5 万 6,000 人（原住民全 16 族中4番目の人口）の人々が南投県、花蓮県、高雄市、台東県の山麓部、ならびに台北市や新北市などの都市部で生活している。
- (4) <<http://www.alcd.nccu.edu.tw>>。
- (5) 李壬癸が 1992 年に発表した内容をもとに、教育部が 1994 年に発表した原住民諸語表記法。
- (6) 日本植民地期以来の9族分類に、サオ語、クヴァラン語、セデック語の教材を加えた全 12 冊。
- (7) 李壬癸の研究を基礎としながら、1994 年に教育部が発表した内容にさらなる検討を加え、原住民母語正書法として行政院原民会が 2005 年に正式発表したもの。
- (8) <<http://www.alcd.nccu.edu.tw>>。
- (9) 同委員会では既にアミ語・パイワン語・タロコ語などに関する十数冊の母語関連教材を刊行している。cf. <<http://tmt.pct.org.tw/>>。
- (10) <<http://web.klokah.tw/>>。
- (11) <<http://lokahsu.org.tw/>>。
- (12) <<http://www.alcd-con.tw/reading/>>。
- (13) 同教材シリーズの「編集説明」によれば、教材とは別に各方言の個々の教材（上・中・下）にそれぞれ対応する「導読手冊」（指導ガイド）が用意され、教材と合わせた総冊数は 252 冊に及ぶというが、筆者は「導読手冊」を入手できておらず、未見である。



- (14) <<http://e-dictionary.apc.gov.tw/Index.htm>>。
- (15) 当初計画では 16 種。クヴァラン語辞書については現在も編纂作業が続けられている。
- (16) 鄭教授のブヌン語研究の来歴や同辞典編纂の取り組みについては、鄭 [2009] に詳しい。
- (17) 黄美金はかつて、「1995 年以前／ 1995-1998 年／ 2002-2005 年」の三区分別を用いたが [cf. 黄 2007、2009]、本稿ではその後の潮流も考慮し、筆者なりの区分を採用した。

## 参考文献

### 日本語

- 石垣 直 2015「現代台湾における原住民母語復興(1)——諸政策の歴史的展開と現在」『南島文化』37: 1-24. (沖縄国際大学 南島文化研究所)
- 月田尚美 2014『『原住民族語中級教材』について——国立政治大学原住民族研究センター・2014』『台湾原住民研究』18: 150-160.

### 中国語 (画数順)

- 全 正文 2000 (主編)『国民小學鄉土語言教材 布農語 第4冊 (6年級) 試用本』教育部
- 行政院原住民族委員會 2009『原住民學生升學優待取得文化及語言能力證明考試 基本語彙、生活会話百句、模擬試驗及練習題【郡群布農語】』行政院原住民族委員會
- 何新貴／曾瑞琳 1993『布農族母語課本 (二) 讀與寫』南投縣天主教山地服務研究社
- 李 台元 2007「族語規範化——透過族語教材編寫模式的解析」台東大學華語文學系 (編)『原住民族語言發展論叢——理論與實務』: 269-284. 行政院原住民族委員會
- 2011「台灣原住民族語詞典的發展歷程與編輯特色」國立東華大學原住民族發展中心 (編)『原住民族語言發展——理論與實務論叢』: 226-248. 行政院原住民族委員會
- 呂 必賢 (主編) 1995『布農母語讀本 首冊』花蓮縣政府
- (主編) 1996『布農母語讀本 第一冊』花蓮縣政府
- 林 修澈 2007「政大版原住民族語言教材編寫的回顧與展望」台東大學華語文學系 (編)『原住民族語言發展論叢——理論與實務』: 225-236. 行政院原住民族委員會
- 林 修澈 (主編) 2006『族語紮根——四十語教材編輯的四年歷程』政治大學原住民

族語言教育文化研究中心

胡 金勝（主編）2012『臺東縣 101 年度本土語言輔導團 布農族語言辭典』臺東縣政府

胡 金勝（編）2014『Bunun habas tu Sinhahasam 布農文化辭條典 禁忌與倫理』台東縣延平鄉桃源國民小學

政治大學原住民族語言教育文化推展中心（編）2001a『原住民族語練習題』（全 12 冊）  
政治大學原住民族語言教育文化推展中心

——（編）2001b『原住民族語練習題6 布農族』政治大學原住民族語言教育文化推展中心

政治大學原住民族語言教育文化研究中心（編）2006『國民中小學九年一貫課程 原住民族語 學習手冊／教師手冊』（第1階～第9階、計 720 冊）教育部・行政院原住民族委員會

政治大學原住民族研究中心（主編）2014『原住民族語中級教材——閱讀書寫篇』（<http://www.alcd-con.tw/reading/>）

黃 美金 1995「台灣南島民族母語現有教材之比較和我見」李壬癸（編）『台灣南島民族母語研究論文集』：77-96. 教育部教育研究委員會

—— 2007「台灣原住民族語言教材之回顧與展望」台東大學華語文學系（編）『原住民族語言發展論叢——理論與實務』：213-234. 行政院原住民族委員會

—— 2009「台灣原住民族語教學之回顧與展望」『清雲學報』29（4）：139-166.

高 清菊 2007「九年一貫課程賽夏語九階教材分析」台東大學華語文學系（編）『原住民族語言發展論叢——理論與實務』：237-252. 行政院原住民族委員會

教育部（編）1997『國民小學鄉土語言教材 布農語 教師手冊 第1冊（3年級）試用本』教育部

教育部（編）1998『國民小學鄉土語言教材』（全 13 冊）教育部

許 韋晟 2007「試析九年一貫德路固語九階教材」台東大學華語文學系（編）『原住民族語言發展論叢——理論與實務』：253-268. 行政院原住民族委員會

鄭 恆雄 2009「台大學術資產——南島語族研究」『臺大校友雙月刊』64：6-24.

鄭 恆雄（主編）2010『布農族郡群方言詞典』行政院原住民族委員會

趙 素貞 2011『台灣原住民族語教育政策之分析』東華大學原住民族學院

Anu Ispalidav（主編）2008『布農語讀本——認識郡群布農族語 Bubukun』台灣基督長老教會台灣族群母語推行委員會

Anu Ispalidav（編）2012『認識布農語基本構詞——以 Isbubukun 用語為主』台灣基督長老教會台灣族群母語推行委員會

Manias Istasipal（主編）2006『布農族語詞彙集——認識巒群布農族語【TAKBANUAZ】』使徒出版

Tahai Palalavi 2012『布農族字典 dangia hai daaza halinga』台東縣延平鄉桃源國民小學

インターネット (最終閲覧: 2015 年 11 月 13 日)

台灣基督長老教會總會・台灣族群母語推行委員會 <http://tmt.pct.org.tw/>

政治大學原住民族研究中心 (政治大学 ALCD)

<http://www.alcd.nccu.edu.tw/index.php?routing=Index&action=index>

原住民族語 E 樂園 <http://web.klokah.tw/>

原住民族語中級教材——閱讀書寫篇 <http://www.alcd-con.tw/reading/>

原住民族語辭典數位化平台 (行政院原住民族委員會)

<http://e-dictionary.apc.gov.tw>

原住民族語言能力認證測驗 <http://lokahsu.org.tw/>